

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第18号／1991年（平成3年）3月発行（年3回発行）

発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156)

T E L 03-3426-2323

発行人＝石井哲夫 編集人＝友田篤

二宮尊徳に学ぶ人生経営・学校経営

佐久間 雪 夫

二宮尊徳（金次郎）は、戦前、全国の小学校の校庭に銅像が建てられ、又、国定教科書にもとりあげられているので、その名は広く知られているが、真価はあまり理解されないのが現状ではなかろうか？

二宮尊徳は少年時代、苦難の中から勤勉と忍耐と努力によって一家の再興につとめ、積小為大の法則を自然から学び活用した。

この実力が小田原藩主、大久保忠真公に認められ、家老職、服部家の立て直しの依頼を受け、服部家の復興にあたった。

服部家の建て直しに成功した尊徳は、小田原藩の分家である宇津家の桜町領（栃木県）の農村の立て直しを懇願されて桜町領へと赴任した。尊徳36才の時である。

桜町に着任して、まず第一の仕事は、鶏晨回邑であった。毎朝4時に起きて村を廻り、村民の生活実態を調べ、怠けているものを諭して励まし、勤勉に働いているものに褒美をあげて奨励し、また村人の善行を村民の投票によって表彰を行なった。

しかし、いったん衰廃した村の経済や村民の心の立て直しは難しく、特に上司の豊田正作からは、ことごとく反対され妨害された。

7年間、必死になって桜町の復興に努めたが、ついに行き詰り、一人彷徨の旅にでた。そして、成田の不動にこもり、21日間、断食祈願を行ない、思索と反省にふけた。

成田山の修業で、二宮尊徳は一円融合・慈悲仁愛の心の眼を開いた。その後、桜町に帰

り、思索と仕法をくりかえし実施しているが、この頃から哲学的思索は爆発的に醸成し、二宮実践哲学が成立していつている。（42才～49才二宮尊徳全集36巻）

二宮尊徳の教えを報徳といっているが、その教えは、至誠・勤労・分度・推譲の4つにあらわされている。

勤労はムダとムリとムラをなくし早く楽に仕事ができるよう創意工夫して働くことにあり、分度は、記録や実態調査をもとにして合理的な計画を樹て最善の方策を講ずることである。推譲は恩恵を受けていることに日々感謝し、世のため、子孫のために譲っていく心であり、道徳と経済の一元化を「至誠」をもって貫くことを教えたものである。

最近、報徳がいろいろな人から見直されており、その理解もすすんできた。

経済専門誌、「日経ベンチャー」1月号でも日本の経営のルーツ「二宮尊徳の経営手法」をとりあげている。

「代表的日本人」・「後世への最大の遺物」を著わした思想家、内村鑑三先生もこの書物の中で二宮尊徳を高く評価している。

おわりに二宮尊徳の歌を記しておきたい。

おのが子を恵む心を法とせば、
学ばずとも道にいたらん

（東京都立しいの木養護学校校長）

この頃、人と話をされていて、その表現力の巧みに驚かされることがある。その中で、厚生省で長年働いていた元役人の言葉がある。かつて、日本社会事業大学の専務理事で現全国社会福祉協議会の常務理事の板山賢治氏が、「鉛筆なめなめ作ってみましょう」などと、大学の計画や青写真を書き上げていた姿を思い出すことがある。

最近では、一緒に仕事をしている同大学の穂積事務局長が、「姿、形のいい考え方」とか「おさまりを考えると・・・」などというフアジー(あいまいな)な言い方で、全体の様子をわからせようとするなどがある。

その他、一生懸命説明することを、「キャンキャン言う」とか、働くことを「汗をかく」などと言ったりすることがあって、当意即妙な形容が流行っているのだという感じがしているのである。

私も、これらに負けずに、施設運営の創造性を書き上げてみたい。

① 姿・形のおさまりのよさ
眠る施設長に子守の職員
施設の置かれている状況に目をつむり、専ら、今の居心地のよさに没入している施設長の傍らには、

眠っている子どもの子守をしている職員がいて、その点の姿、形は治まっではいるが、さて、その下でどんな部下が育っているものだろうか。

踊る施設長に観る職員
何かと言うとお説教したり感激したりして、施設の中で目新しいことを始めたり、事業を拡大したりしがちな施設長を感心したり、感動して観ている職員がいたりして、施設は常に活性化されるので

「まあ、まあ、そうあわてないで」と日和を見ているかと思えば、「そんなこと絶対、許せない」と意固地になって、他人に譲ろうとしないことがある。こんな時、誰がどうして局面を打開することになるのやら。

。メモ魔と会合マニア
肌目の細かな配慮をするために、何でもメモリ、また数多くの打ち合せも大切なことではあるが、これらに追われつづけているのでは、

施設経営の創造性(その九)

石井哲夫

あるが、さてこれで部下は疲れすぎないものであろうか。

結論として、姿・形のおさまりのよさは、施設全体がどう調整し、一致し、安定していくのかという問題なのであろう。

②きめの速さと細かさ
言うまでもなく前のきめは「決め」で、後の「肌目」である。

。日和見、意固地
施設長にしても、職員にしても、その時々様子をうかがっては、

なんのためのメモや会合かわからない。結論としては、施設長の決断とそれを支える情報収集力や、職員や利用者や家族の了解や納得をとりつける努力が大切ということ。

③アウトプットとインプット
横文字ばかりだが、施設と社会との交流なのである。

。内憂・外患の度合
一人よがりな内閉的な施設がある。利用者のプライバシーを盾に

とって、外へ顔を出したからない職員を動かすことも出来ない。このような施設が一度でも内に不幸事を惹きおこすと、すぐに恐慌がおきてくるのである。

。無精と無気力
よくない施設では、何事も気力がなく、いいかげんな暮しをしている。処遇内容も吟味せず、外に向かって職員の研修や、年次報告も怠りがちである。

結論として言いたいことは、社会福祉施設としての存在が明らかに社会から取り残されないように、時代の流れに敏感に、しかも社会の中で確固とした存在感のある施設運営を心がけてほしいものである。

以上の3項目は、社会福祉施設の全体を眺めて、その施設が利用者の生活や療育に役に立つような機能を持ち続けていけるように点検する際に重要と思われる項目なのである。

しかし、これは飽くまでも、施設の状態を評価するための項目であって、この内容をよくしていくためには、やはり施設長のリーダーシップを問うことになるのである。

私たちの

うたごえ

須藤福祉センター各事業所からの報告

相談部より

喜多 民子

・私たちの仕事の原点
 かって、入園入学相談会なるものが年に二回も盛大に行われていた頃、「相談」という仕事そのものもかなり幅をきかせていたように思います。奥村先生を始めとする諸先輩方もまだお若く、勿論私も大変若かったわけですが、その頃は、「嬉泉」発祥の地といわれる原宿の社会事業大学児童相談室に、石井先生を中心に志を同じくする数人の方々が集まったというその心意気の香りのようなものが子どもの生活研究所には満ちておりました。その香りの大きな部分は、この「相談」の精神ではないかと思えます。

「相談」というのは未知の人との出会いであって、短かい時間の中で、できるだけその人に近づきその人のかかえている問題を知る



と同時にその人に魅かれていく過程でもあると思います。相手は、子どもでも大人でも、どのような人であっても「相談」の心のようなものの本質は同じであって、これは私たちの仕事のどの領域にも恐らく必要であると思います。こんなことから、「相談」は私たちの仕事の原点ではないか、と思ったのです。

・最近の「相談」から、
 ここ二〜三年は、一年間に約七〇名前後の新規の方々が訪れ、そのうちの二割強の方が、こぐま学園を始め、いろいろなグループに入園します。

七〇名の内訳は、自閉症もしくは自閉的傾向と考えられるお子さんが一番多く、次に緘黙とか集団不応のお子さん、自閉とは違う発達障害とみられるお子さんが、何人かづつ、という状況です。

昔は、引っ込み思案の子とか友だちに乱暴してしまう子とか親の言うことをきいてくれない子などもっとバラエティに富んでいたと思いますが、最近はかなり自閉一色という印象です。これは勿論、石井先生が自閉症児への治療教育、施設療育という分野で広くその実績を知られるようになっていきました。NHKの放映を見てとか石井先生の著書を読んで、という来所の動機が殆どです。

最近の相談で難しいと思うことは、「我が子は何という名前の障害か」ということを決めたがり、是々の障害には是々の方法でという風な、障害別教育マニュアルのようなものを求める方が増えていくことです。世の中に情報が氾濫

しすぎていることも一因だと思えますが、「自閉症なんでしょうか、それとも学習障害なんでしょうか」という種類の質問が多くきかれます。

できるだけ手っ取り早くよくしたい、少しでも優れた方法で教育したいという気持はとてもよくわかりますが、人間同志影響し合うためには、共通の場面で共通のイメージと共通の感情が湧くということが必要だと思えます。そのことから考えて、人というものに、安心・満足・快さ・楽しさなどを予感し期待する様子がなく、一人で、自分なりの安定を求めているというままでは、どうしようもないのだということ、そのお子さん一人一人の様子に合わせて納得していただくことに頑張っています。

(子どもの生活研究所)



『私たちのしごと』の周辺

自閉症児治療教育実践講座と研修について

白石 雅一

去る二月九日、一〇日に第七回自閉症児治療教育実践講座（メインテーマ「課題をどう実施するか」）が、須藤福祉センターで開催されました。石井所長司会によるシンポジウムに、文教大の今野義孝先生・淑徳大の宇佐川浩先生・東北福祉大の阿部芳久先生を、分科会に国立秩父学園の小沼肇先生をそれぞれお招きし、講座は進行して行きました。受講者七〇名（定員五〇名）と中規模なセミナーではありますが、大変活気のある講義・実演・討議が展開され、受講者全てが、何がしかの「おみやげ」を各現場に持ち帰ることができたのではないかと考えております。

七回の歴史を数えるこの講座は、日常交流が持ちにくい現場の皆さんが、宿泊を共にし、分科会・親睦会等で存分に互いを刺激し合える場を提供しつつ、「実践」を通して研修してもらうことを最大の目的としています。中でも、石井所長による治療の実演と講義が本

講座の「核」であります。今年、不安と混乱で状態を悪くして登場したG君への刺激調整―課題的交流療法の展開と、特別に来園願ったK君さんとの情緒交流を披露して頂き、多くの受講者が「受容的交流」の真価を体感することができたのではないかと考えています。社会福祉法人嬉泉の主催するセミナーは、一般の受講者のみならず、会場設定・食事準備・記録等の係、分科会で事例を発表する嬉泉の職員にとっても、「研修」の場であります。①施設の利用者に対する時と同じように気を配り、過ごしやすい環境を用意する、②日常の私たちの実践を受講者に分かりやすく伝える、そして、③石井所長の実践と理論とを、他の講師の先生方との対比の中で盗み取る、ということが、私たちに用意された研修課題であるのです。

(子どもの生活研究所)

子研の産直販売のこと

柏木 理江

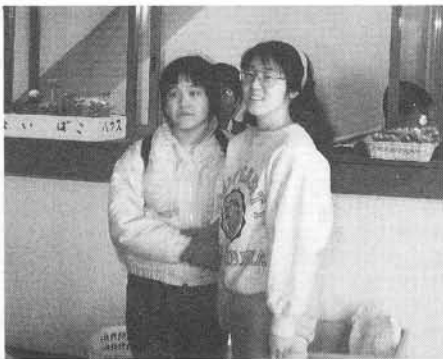
はじめこの係りを言い渡されたときは、正直言って面倒な仕事がまわってきたものだと思います。しかしいざ始めてみると、物を売ってお金に変えるという作業が思いのほか面白いのです。今では、もしかしたら自分は商売に向いているのかもしれない、などとフト思ってしまうほど夢中になり、売り上げの多少に一喜一憂する毎日です。

千葉の学園で取れた野菜や卵を子研の玄関先に並べて売っているのですが、同じ野菜ばかりが毎日毎日並ぶと、さすがにだれも見向きもなくなってきました。そこで、野菜が大量に取れてあまってしまったときだけ、試験的に近くの無農薬野菜を扱うお店に卸してみることにしました。まだ始めたばかりで軌道に乗っているとはいいたいがたいのですが、こちらの事情も理解していただき、滑り出しはまずまず、と言ったところです。

野菜や卵を近所の方に買っていただく、そのやり取りの中で学園のことをお話ししたり、学園からく

る販売の係りになっっている利用者の人達に接していただくことでこちらの様子を実感してもらうことは、時として、難しい説明をするよりも、私たちの仕事を解ってもらうのに役立っているように思うことがあります。無農薬野菜のお店に品物を卸しているのも、主こそういった願いが込められています。

子研の産直販売が、世田谷の名物になることを夢見て野菜売りに勤しむ日々は、まだしばらく続きます。(子どもの生活研究所)



嬉泉の出来事

絵の寄贈

昨秋、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園の正面玄関に、一对の絵が飾られました。「野ぐるみ」(春の院展入選作品)「野ぐるみⅡ」と題された作品は、宇都宮大学教育学部助教の露木恵子先生によるものです。



先生は、いろいろな施設を訪問され、福祉状況などを学ばれる中から、病院やホスピス、心身障害者や福祉のための諸施設などにご自身の絵の寄贈を実現したいと願われるようになったとお聞きしました。

この度、東京都社会福祉協議会を通じてご案内があり、ぜひとも私たちの学園にもいただきたく先生に直接お願いいたしましたところ、快くご寄贈くださいました。本紙面をお借りして、改めてお礼を申し上げます次第です。(友田)

ディアナ・ロペス女史

昨秋、メキシコよりディアナ・ロペス女史が来日されました。女史は、メキシコ文部省特殊教育局高官であり、日本の障害児者療育についての研修のため滞日され、この研修のお手伝いを嬉泉がいたしました。

メキシコでは障害児者への医療、教育及び福祉に関する制度が構築されておらず、臨床理論も模索している状況とので、とりわけ自閉症児者について、どのように対応してよいか、実践的な考え方を要望しているとのことでした。先年、石井所長がメキシコを訪問し、女史も受容的交流療法を勉強されており、「自閉症児の療育については、メキシコの国民性を考えると、受容的交流療法が最も馴染むと思う。」とおっしゃっていました。

嬉泉とメキシコの交流は、今後も続きます。女史のご活躍を期待します。(直人)

全国自閉症者施設

連絡協議会

自閉症者施設が現在、全国に23施設ある。といっても、自閉症者施設は制度上は存在しない。自閉症者の療育向上をめざし設立された精神薄弱者更生施設および同通所施設を自称して自閉症者施設と呼んでいる。

これらの施設が集まり、昭和62年7月に全国自閉症者施設連絡協議会(現会長石井哲夫)が発足した。

毎年一回、事業の一環として大会を開いているが、今年度は11月8日から3日間、三重県の「あさけ学園」で開催されその事務局を袖ヶ浦ひかりの学園がお引き受けした。参加施設も計画中を含め26施設と盛会であった。

大会のテーマは「大人の生活」で、現在、自閉症者施設が抱えている社会参加、自立の問題を反映したものだった。今回から分科会の形態が取り入れられ、大会2日目は「自閉症者施設の運営と制度的保障に向けて」「地域に根ざした生活について」「作業・社会的自立について」の3グループに別れて活発な討議がなされた。

また、大会は数少ない自閉症者施設の交流の場である。様々な情報交換がおこなわれる中で、強く感じるのは職員確保の困難と、職員育成である。ある施設では後援会の努力で職員を定員の2倍を確保しているという。またある施設では前任者が療育の困難さから退いていき、20代の職員が中心になって運営しているという。

こういった状況のもとでの行政への制度的保障の要求となるわけだが、その推進母体として連絡協議会の活動におおいに期待したい。

(川相)



チロリンアパート

単身者用宿舎の 改修工事

チロリンアパートを知っていますか。袖ヶ浦のびろ学園付属の単身者用寮のことです。「チロリン」という言葉はひかりの学園の利用者の秋山住江さんが「石井先生ねこ」などの言葉とともに発していたものです。寮の名前がまだなかった時、当時の居住者が集まってきめました。

昭和52年12月袖ヶ浦のびろ学園とともにできたチロリンアパートも雨漏りがでるなどいたみが目立つようになりました。また時代とともに住まいの質が上がり風呂、便所、台所共用のアパートは敬遠する人もふえました。

そしてこのたび12月から3月末

日までの予定で内装と外装の一新工事をやることになりました。現在一階に10室二階に10室あるところを二室ぶちぬいて一階5室、二階5室になります。各室に便器付きユニットバスと台所が付き床はフローリングになります。

完成すれば家族宿舎にひけをとらない設備となりいっそう優秀な職員の確保に期待されます。(喜多)

職員の思い

社会福祉士に向けて

君島 勝利

現在私は、全社協研修センター社会福祉士通信課程に学んでいます。入学当初は、仕事と勉強を両立させることを決意していました

が、現実には厳しく、勉強時間を創ることさえ非常に自律心を要します。大学を大きな船に譬えれば、通信教育は、あたかも小さなボートのようです。一人で懸命にオールを動かさなければなりません。今のところ正直言って、レポート提出日直前になり、やっとの思いで原稿用紙をうめているという教科も少なくありません。

それでも、なんとかやり切っ

ているのは、石井先生をはじめスパーバイザーの激励があるからです。又、大学院で学びながら働いているある先輩は、私の心中を察して、文献を紹介して下さいたり、私の拙文を、まっ赤になるまで添削して下さいました。本当に言葉に尽せぬ暖かさを感じました。

昨年の夏には、一週間スクーリングに参加しました。そこで、三年前、嬉泉が主催する箱根で行われた自閉症児治療教育セミナーで知り合った方に再会でき、とても感激しました。「ほんま、恐い仕事やねー、この仕事は」というのが口ぐせ。利用者に対する自らの傲慢な心を常に戒め、何処までも謙虚に向学心を燃やされている姿に心が打たれました。最終日、「来年の夏、また、この机で会おう」と約束し別れました。

又、参加者の80%以上が中高年の方々で、学力、経験、気迫、全ての面で私は劣っていると反省させられました。

私は、大学で社会福祉の専門教育を受けておりません。演劇活動に明け暮れ、「俺は、芸術学部演劇学科だ」とうそぶいていました。それでも、この仕事がしたい。何か自分にもできるのでは、という

思いだけでやっています。

そんな私にとって、社会福祉士への道はあまりにも遠い。しかし、一生この仕事を続けていく覚悟なら、焦る必要もないという気にもなってきました。

通信教育を受けながら、のびろ学園で自閉症児(者)と生活を共にして一年になろうとしています。

当初、「通信教育で学んだことを職場でどれだけ生かせるだろうか」と考えていましたが、今は違います。私を最大限に叱咤激励してくれるのは、実は、自閉症児(者)なのです。彼ら程、私自身の人間性を赤裸々にする人はいないので。それは、言葉、知識、方法を越えて魂と魂とのぶつかり合いこそを強烈に必要としているからです。

今、こうして振り返りながら、厳しい状況の中でも、私は、様々な人に支えられ、励まされていることに感謝の気持ちで一杯です。

今年10月卒業することを誓い、また、いつの日か国家試験に合格することを夢みながら、日々仕事と勉強の両立に挑戦しながら、自己を磨き、一步一步成長してゆきます。そして、自閉症児(者)共に悩み行動するホット社会福祉士になること目指してゆきます。

(袖ヶ浦のびろ学園)

ひかりのタイムス

独立第12号

「ひかりのタイムス」の欄は、編集長は袖ヶ浦ひかりの学園利用者の山岸裕君で、編集人の友田と相談しながら、原稿や作品を学園の利用者の人達から募集して編集しています。応募してくれた原稿については、加筆や訂正は一切しないで(行数の関係で本人の了解の上削除はする)原文のまま山岸君に得意のワープロで清書してもらい、割付け・編集の作業をしています。さらに学園の利用者の人達の作品などの写真を掲載しています。

「性について」

山岸 裕

自閉症者にとって、性の問題ほど避けて通れないに関わらず、タブー視されやすい問題はない。たいていの当事者は、自覚なく本能として無意識に性に目覚めてしまう。

さてこう書く筆者自身はどう思うか・・・この情報化社会で、メディアが垂れ流す性的刺激に対して、感覚的に、こちよく受け止めている。自閉症者ほど、視覚に訴えるメディアに対して敏感に感じるひとたちはいない。そういう刺激に弱い癖に直接性行為をしようと

いう気持ちはある。だがドウスレバ実行できるか分からないので、やらないままである。

しかしこれは、社会参加において避けて通れない。問題だ。

性の情報洪水、刺激の中で性知識のないわれわれは、身をゆだねられている。そこらへんがタブー視されている。当事者が性というのを語ってもいいのではないか・・・(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

勝浦みずほ学園の見学

小山 洋次郎

勝浦のみずほ学園の見学に行きました。お風呂と洗濯室とリネン室と女子部屋と男子部屋と食堂と

アパートと布団干しを見ました。勝浦のダムを見ました。

お昼のお弁当を食べました。ハンバーグと目玉焼きとサラダとごはんと漬物とハイジューズを飲みました。おやつはカールチーズがけとポッキーチョコレートを食べました。おいしかったです。

それからひかりの学園に帰ってきました。(袖ヶ浦のびろ学園利用者)



やきいもの販売車

鹿児島旅行記

市川 浩志

学園を月曜日夕方六時に出た。小田原まで行って小田原から夜行で名古屋まで行って新幹線に乗った。始めて下りの新幹線に乗って良かった。食事で何か食べた。

小倉まで行ってそこから各駅停車に乗って、よその人に会ってホ

ットした。それで熊本まで行って乗り換えて西鹿児島へ行った。途中八代で学生と一緒に乗った。西鹿児島についた時はもう夜だった。そこから山川に行って山川へついたらのは夜遅かった。食堂へ入ろうと思うけどもう終わりだった。山川の駅で夜、テープを聴いて静かな思いをした。

五時ごろ山川を出て、枕崎へ朝六時半ごろまでついた。バスに乗って坊津へ行った。海へ朝七時について旅館へカバンを置いておばさんと話をして御飯を食べて、八時ごろバスに乗って今岳へ行く女の子とともに一緒に嬉しいと思っただ。今岳へ行っておばさんに会って話をして良かったと思った。そこで海岸へ行き、海で遊んだ。海でテープを流して聴いてラジオを聴いて静かな思いをした。

旅館へ戻って夕食を食べて休みました。朝六時ごろ目が覚めて七時ごろ出て枕崎まで行って、七時半電車に乗って西鹿児島まで行ってから川内まで行きました。十一時半について昼ごろ電車に乗ってそこで学生に会って話をして友達になった。熊本まで行ってそこで窓を開けて学生に怒られた。そこから鳥栖へ行って下車した。テ

ープを聴いて、人とは話をしなかつた。十時ごろ「あかつき」に乗って疲れたから少し寝た。大阪へ朝七時について、通勤時間にぶつかった。

天王寺から南下して御坊へ行った。下車して途中から海が見えた。田辺乗換えで串本まで行ってから潮岬へ行き海を見てテープを聴いて静かな思いをした。

バス停でふらふらした。もう夕方で暗くなってバスに乗って行く。風呂に入って、御飯食べて休んでテレビも見た。朝六時、目が覚めて食事をして串本を朝六時半ごろ出た。紀伊勝浦から快速に乗って名古屋まで行きました。窓を開けたら、車掌さんに怒られました。

名古屋から浜松へ行った。そこから熱海へ行った。伊豆の近くへまた行きたいと思った。

小田原を通して泊江についてバスに乗ってうちへ帰って風呂に入ってお正月休みになりました。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

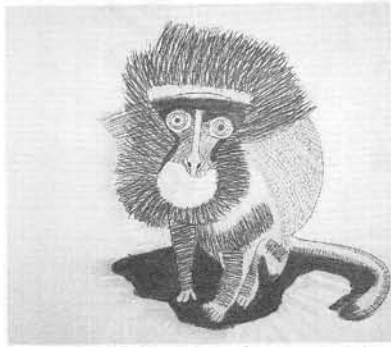
一年のこと

村岡 敦

ぼくが、しんめい販売をして、一年近く立ちます。最初は、仲尾

正先生と、販売をやりました。それから、四月から、中山先生・及川先生・平野先生にかわった。あとは、東京販売は、三森先生です。たまに、喫茶店にも行きました。

このころ、行かなかったで、少し懐かしいです。あとプールにも行きました。あゆみの先生は、中山先生・矢沢先生・裕子先生になりました。ボーリングしに行きました。これは五月の事です。櫛橋君、深谷君、田中君が行きました。楽しかったので、又行ってみたいです。それから、すかいらくで外食をしました。これは四月の事です。八月にはすいかわりをした。すいかわりも面白いです。あとは葛西臨海公園に行きました。電車で行きました。姉ヶ崎から、乗っ



松井邦弥君の作品 (マントヒヒ)

たのだが、駅が少し雰囲気が変わっていたので、びっくりしました。そこで、蘇我駅で京葉線に乗換えました。水上バス(遊覧船)にも乗りました。

又乗りたいと思います。それから、グループホームでパーティーをやったです。六月と十二月にやりました。島田先生の家に行き、そこでケーキ作りをしました。グループホームの人達が御馳走してくれました。パーティーにはたまに行きたいです。これからも東京販売、しんめい販売も続けます。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

デイズニールランドの話

秋山 良江

1月31日の事、私はやすらぎのみんなと一緒にデイズニールランドへ行きました。そして、私は大場先生と二人で、色々な乗り物に乗りました。「スペースマウンテン」や「ビッグサンダーマウンテン」は、ちょっと怖かったけど楽しかったです。

「イツツ・ア・スモールワールド」は、お舟のようなやつで、中に入って行くと、子供や動物の形が踊りながら合唱をしてました。「白雪姫と七人の小人」も乗りま

したが、これは中が結構恐かったです。あと「シンデレラのゴールデンカルーセル」と言う回転木馬に乗りました。

「ビッグサンダーマウンテン」の注意書きは、日本語と英語と中国語の三通りに書いてありました。それから、「スペースマウンテン」に乗る時は、「宇宙飛行士のみなさん」とか言うナレーションが聞こえました。本当は、「ピーター・パン空の旅」も乗りたかったんだけど、凄い行列を作っていて、40分待ちだったので、代わりに「ホーンテッドマンション」に入った。

「ホーンテッドマンション」は、幽霊屋敷みたいな物で、乗り物に乗る前に、部屋に入ります。この部屋は、実はシャッターが閉じた後で「この部屋は窓も扉もない部屋だ！」とか言うナレーションが入ったり、名画が動いたりしてました。でも乗り物の方は、中が幽霊だらけで中には自分の首を外して自分で、手に持っている物もありました。そして最後の方になると、鏡がありそこには幽霊の顔がボヤッと浮かんでいました。そして大場先生が帰りにおみやげに、犬の陶器細工を買って帰りました。(袖ヶ浦のびる学園利用者)